

忠北大学校交流研修成果報告書

2005年10月3日

学術企画部 学術情報課 学術情報係

矢内美どり

<はじめに>

2004年11月に締結された、茨城大学と忠北大学校間の職員交流研修協定に基づき、忠北大学校を訪問する機会を得た。

忠北大学校との学生間交流は1991年に始まり、今年で15年目という歴史をもつ。訪韓・訪日研修旅行や交換留学が行われている。

茨城大学では、2005年1月に忠北大学校図書館の金封希さんを迎え、第一回研修を実施した。そして今回、私が茨城大学からの第一号として受入れて頂いた次第である。

<1. 研修の概要>

研修期間：平成17年8月17日から平成17年9月15日まで（30日間）

研修日程：8月17日から25日まで学生訪韓団と同行し、以降は図書館を中心に学内部局を見学した。（別紙1・2参照）

他の見学機関は、国立中央図書館、ソウル大学校中央図書館、KERIS（以上ソウル市内）、清州市立情報図書館、奇跡の図書館（以上清州市内）である。

<2. 忠北大学校について>

位置：大韓民国の中部・忠清北道・清州市（道庁所在地、人口約60万人）

清州市からソウルまでは高速道路約1時間30分、仁川空港までは約3時間である。

沿革：1951年に清州農科短期大学として開学。1956年の道立忠北大学への改組を経て、1963年国立忠北大学校となる。韓国に24ある国立大学のうちの1校である。

学部：人文、社会科学、法学、教育、経済、人間環境、自然科学、工学、電子工学、農学、薬学、獣医学、医学の13学部

学部学生数：21,145名

教職員数：1,966名

キャンパス総面積：約990,000㎡



キャンパスの風景



大学本部棟



校是

< 3 . 忠北大学校図書館について >

中央図書館と3つの分館（医科図書館・法科図書館・蛭雪館）から構成されている。

(1)中央図書館

正門から徒歩約5分の場所に位置している。4階建てで、入口は南側と北側の2カ所ある。以前は入館に学生証が必要だったが、システムが故障しやすい等の事情から、現在は不要となっている。しかし、入口には警備員室があり、施設管理や保安対策がなされている。



中央図書館・外観



中央図書館・周辺

1階は、資料返却カウンター・PCコーナー・AVコーナー・新聞コーナーがある。特徴的なのは、学習室の座席予約システムが設置されている点である。それだけ図書館で勉強する学生が多いのだろう。同システムは、2003年より導入されたとのことである。



返却カウンターへの入口



学習室の座席予約システム

2003年に資料返却と貸出カウンターを分けたが、現在は一本化を検討中とのことである。



返却カウンター



返却処理は学生がセルフサービスで行う

PC コーナーは2ヶ所あり、一方は予約が必要となっている。

予約不要のコーナーでは、PC 約 30 台に対して、有料のプリンタが 2 台設置されている。

茨城大学図書館でもそろそろ、プリンタの有料化を検討すべきではないだろうか。



PC コーナー (予約不要)



PC コーナー (要予約)



PC 予約カウンター



他大学のネット講義を受ける学生も多いらしい

2 階は、学術論文室・雑誌資料室・コピー室・共同学習室がある。

学術論文室には忠北大学校の学位論文が納められている。学位論文の電子化も行われているが、冊子体でも収集しているとのことである。

雑誌資料室では、ILL (他の図書館との相互利用サービス) を受付けている。

ILL システムには KERIS(Korean Education Research Information Service) ・ KORS(Korea Resource Sharing Alliance)の 2 種類がある。

茨城大学図書館では、NII(国立情報学研究所)のシステムを通して、全国の大学図書館・国会図書館・BLDSC (British Library Document Supply Center)に文献複写依頼ができる。よって、複数の ILL システムの使用は煩雑に感じた。

忠北大学図書館では現在、KERIS と NII が共同運営する、日韓 ILL サービスに参加しているが、残念ながら需要はあまりないとのことである。

また、日本では図書の現物貸借は一般的だが、韓国ではほとんど行われていないとのことである。茨城大学図書館では、県域 ILL により県内の公共図書館にも貸出を行っている話をしたら驚かれた。

雑誌資料係長は、利用者教育も担当しているが、図書館主催の利用者教育は2005年度から開始したとのことである。以前は、データベースの販売会社や関連機関から講師を招いて開催していたそうである。茨城大学図書館の利用者教育の資料を送るよう、求められた。



雑誌資料室



2階は吹抜けになっており、開放感がある

3階は、貸出カウンターと主題資料室がある。

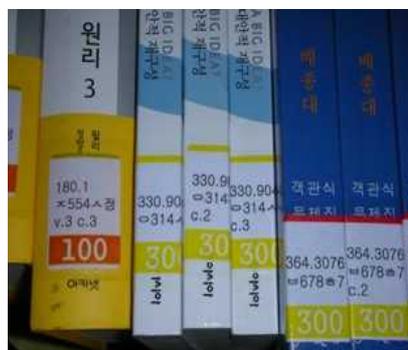
貸出カウンターでは、実際に資料の貸出業務を体験した。茨城大学図書館と同様、学生証から利用者データを読み出し、貸出資料のバーコードを読み取るという方法である。ただし、付録の貸出はマニュアル入力で煩雑に感じた。茨城大学図書館では付録のデータも登録しており、貸出手続きは簡便である。

主題資料室には、「人文科学」・「社会科学」・「自然科学」・「言語文学」の4テーマごとに分けて図書が配架されている。また各部屋にはレファレンスデスクが設けてある。このようなやり方は、2003年から開始したとのことである。

各主題専門の職員がいるというのは大学図書館として理想的である。しかし、人員配置が必要な点、主題資料室といっても雑誌資料は置いていない点が問題とのことである。



主題資料室。書架には余裕がある。サインはスクールカラーの臙脂色に統一されており、整然としている。



請求記号のラベルは分類ごとに色分けされており、大変見やすい。

4階は、洋書資料室・東洋資料の書架・集密書架がある。

洋書資料室には、主題資料室と同様、レファレンスデスクが設けてある。しかしこちらも洋雑誌は配架していない。

東洋資料の書架には、中国語・日本語資料が配架してある。残念ながら、日本語資料は数が少なく、古い。忠北大学校には日本語学科はないため、仕方がないのかもしれない。

集密書架には、古い資料が配架してある。また、書架を増設するスペースがあり（茨城大学図書館の教養教育図書コーナーほど）、羨ましい限りである。



洋書資料室



集密書架

(2) 医科図書館

医科図書館は1990年に開館した。医学部棟の1階にあり、失礼ながら図書館ではなく「図書室」との印象を受けた。概要は下記のとおりである。

蔵書数 : 図書 4,149 冊・雑誌 10,675 タイトル・Online Journal 20 タイトル
その他電子資料 147 タイトル

サービス対象 : 1,272 名 (内訳 : 学生 417 名、教職員 136 名、大学附属病院職員 719 名)

開館時間 : 9:00-18:00 (土日休館)

ILL システム : MEDLIS (Medical Library Information System)

職員数 : 3 名



医学部棟



医科図書館内

(3)法科図書館

法科図書館は 2003 年に開館した。こちらもやはり法学部棟の 1 階にあり、「図書室」の趣である。法科大学院の開設にあたり、図書館の設置が必要だったため開館したとのことである。詳しい資料はなく概要は不明である。質問すべきだったと後悔している。

(4)蛭雪館

他大学の建物を買取り、2002 年に開館した。図書館に位置付けられているが、実際には学習室だけで図書・雑誌は置いていない。全 4 階の建物のうち、1 階の新聞ブラウジングコーナーと事務室以外は、全て学習室になっている。

ここでもやはり座席の予約システムが置いてあり驚いた。



蛭雪館・外観。キャンパスを出て
徒歩 5 分の位置にある。



蛭雪館の学習室

(5)図書館システム

忠北大学校図書館では 1987 年より、ソウル大学校図書館が開発した「SORLAS」という図書館システムを使用している。「SORLAS」は、韓国の大学図書館において 50%のシェアを占めているとのことである。

「SORLAS」では、目録登録は書誌項目を表すコードを打ってから、書誌情報を入力するという方法になっている。茨城大学図書館で使用している「NALIS」では、書誌項目はあらかじめ表示されており、空欄を埋めていく感覚でデータ入力が行える。

実際に「SORLAS」で目録登録を体験したが、使いづらかった。

(6)その他

図書館内には多くの学生が見られ、活気に溢れていた。反面、日本に比べて私語が多く、携帯電話のマナーも浸透していないように感じた。

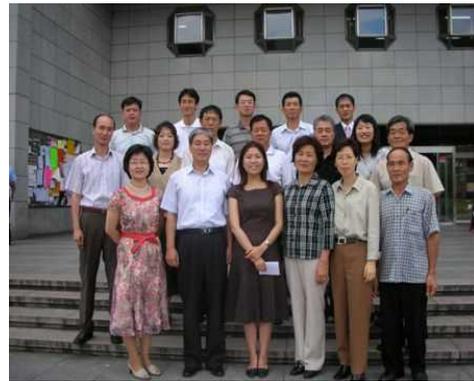
図書館の蔵書・施設面では、スペースに余裕がある点が大変羨ましかった。多くの図書に複本が用意されている点など、スペースのない茨城大学図書館ではできないことである。

また、館内に植物を飾っている点を新鮮に感じた。

その他、忠北大学図書館と茨城大学図書館の比較は、別紙 3 のとおりである。



茨城大学図書館の紹介発表の様様
(プレゼンテーション資料は別紙4参照)



図書館職員の方々と

< 4 . 忠北大学校・事務局について >

茨城大学との違いを感じたのは3点である。

第一に、事務手続きにおいて電子決済を行っている点である。1997年より行っているとのことで驚いた。電子化イコール進歩的とは、単純に言えないだろう。しかし、保存性やセキュリティがクリアできれば、物理的に持ち運ぶ必要があるペーパーより断然便利である。

第二に、行政職職員の採用は、大学が個別に面接を行うのではなく、国から割り当てられた合格者を受入れるという点である。出身地などを考慮して割り当てられるらしい。また、国立大学間の人事異動は管理職レベルでしか行われておらず、日本のように一般職員が転籍するという事はないそうだ。

第三に、勉強熱心な職員の方が多いという点である。職員の55.94%が大学卒で、修士卒は21.68%となっている。(別紙5参照)係長レベルの職員で、仕事をしながら大学院を終了した方や、休職して海外の大学院に通っている方がいた。

韓国は日本以上に学歴社会だという意見があるが、私も同感である。

学内研修では、英語研修(参加自由)とパソコン研修(参加必須)があるとのことである。茨城大学では当交流研修のために韓国語研修を行っているが、忠北大学校では希望者は各自で日本語の学習塾に通っているとのことであった。補助金が出るらしいが、茨城大学の方が恵まれていると感じた。

韓国でも国立大学法人化の計画があるようで、各課で法人化関連の質問を受けた。多くは雇用が不安定にならないかというものであった。

まだ始まって2年目で明確な変化(リストラの実施など)はない点、自分自身は法人化することを理解した上で採用されたため抵抗がない点などを伝えた。

< 5 . 他の見学機関について >

(1)国立中央図書館

蔵書 5,308,848 冊を誇る、韓国の納本図書館である。国会図書館は別に設置されている。概要・Homepage では「1945 年 10 月設立」とあり、朝鮮総督府図書館が前身だとはされていない。日韓関係の難しさは、図書館界とて例外ではないことに思い知らされる。2006 年 8 月の IFLA(The International Federation of Library Associations and Institutions)のソウル大会を控え、準備に忙しいとのことであった。他にも、主題別の分館の設置や、デジタル図書館の開館(2008 年予定)などの計画があるとのことだった。日本と大きく異なるのは、族譜と呼ばれる系図を集めたフロアがある点である。



国立中央図書館・外観



図書館碑。全斗煥大統領(当時)の書。

(2) ソウル大学校中央図書館

言わずと知れた韓国トップの国立大学である。キャンパスは 1975 年にソウル郊外の冠岳区に移転された。最寄りの地下鉄駅からもタクシーで 10 分ほどの、静かな環境にある。ソウル大学校中央図書館は、正面玄関を入ると学習室が広がっている。3 階まで続く学習室を通り抜け、吹抜けの階段を上ってやっと図書館の入口に到着する。忠北大学校でも感じたことだが、韓国の学生は図書館で勉強する傾向が強いのだろうか。分館は、法学・経済・歯学・医学・社会科学・農学の 6 つである。



中央図書館・正面にて



満員の学習室



教養図書コーナー。受験勉強のため読書が
できなかった学生のために設置したそうだ。



書架の様子。ラベルの色分けは
行われていなかった。

(3) KERIS (Korean Education Research Information Service : 韓国教育学术情報院)
1999年に設置された。主要事業は、教育用コンテンツの開発、学術情報サービス・システム (RISS) の運営、教育情報総合サービスシステム (EDUNET) の運営などである。

(4) 清州市立情報図書館

2004年に開館した公共図書館である。全ての図書にRFチップが装備されており、自動貸出・返却が可能となっている。RFチップの導入は、韓国でもまだ珍しいとのことである。なお、学習専用の部屋がないので、今後利用者からのクレームが心配とのことだった。



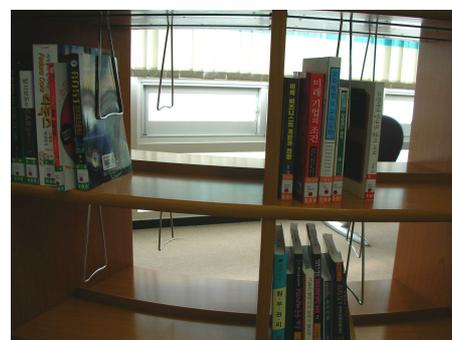
清州市立情報図書館・正面玄関にて



RFチップ。これを図書に装備する。



利用者からのリクエストを受け付ける箱



ラベルの色分けが行われている

(5) 奇跡の図書館

2005年に開館した、児童書専門の図書館である。「全国に図書館を増やそう」という放送局の企画で設立されたとのことである。インパクトのある名称もそこから来ているようだ。



奇跡の図書館・外観



館内の様子

< 6 . 研修の生活面について >

宿泊施設：忠北大学キャンパス内の、寄宿舍・「桂英苑」に滞在。11階立ての学生寮で、11階が出張滞在者向けのフロアになっている。

室内設備はシャワー・トイレ・エアコン・テレビ・冷蔵庫等、一般のホテル並に揃っている。洗濯室は地下にある。しかし、台所や流しはなく、食堂も別の建物となっている。なお、室内のテレビではNHKが視聴できた。



寄宿舍（奥の白い建物）



寄宿舍の室内

学内施設：学生生活館という建物に、食堂・売店・郵便局・農協が入っている。



学生生活館



農協では円の両替も可能である

周辺環境: 飲食店やコンビニが多く、賑やかである。食事や日用品の買い物に不便はない。大型スーパーを含むショッピングモールは市内高速バスターミナル近くにある。(宿舎からタクシーで15分ほど。韓国のタクシー運賃は日本のバス並である。)



キャンパスの周辺



市内の中心部

日本からの携行品: 海外対応のコンセント・変圧プラグは必須である。大学周辺に電気店はなく、学内売店でも取り扱っていないようであった。パソコンは図書館事務室に用意して頂けるという話であったが、念のため私物のノートパソコンを携行した。宿舎内では、モジュージャックを使用してインターネットへの接続が可能であった。無線LANの有無については確認しなかった。事務室内ではWindows韓国版を使用した。アイコンやショートカットキーは共通であるので、操作にあまり支障はなかった。



室内のプラグはこのタイプ



食堂はセルフサービス



朝食にはパンも出た



TOEIC 関連の広告が多い



大学のマスコットキャラ



食堂では大量のおかずが出る。食事を残すのは満足した証とみなされ、無礼にはならない。

< 7 . 今後の交流研修への提言 >

(1) 「交流」研修の成果について

大学を取り巻く状況が厳しくなる中、時間とお金をかけて行うのだから、当研修には当然相応の効果が求められるだろう。私自身、具体的な業務を行うわけでもなく、1ヶ月もの間派遣されることに戸惑いもあった。しかし研修を終えみて、当研修に冠せられた「交流」という言葉は、成果という観点でだけ論じるものではないと感じている。

敢えて挙げるならば、私にとっての成果は、忠北大学校図書館をはじめ、韓国の図書館事情を知ることができた点、忠北大学校を知る過程で、茨城大学のよさ・課題に気づいた点、業務の枠を離れて、語学や海外滞在という課題に挑戦できた点である。

(2) 受入側としての準備について

今後、相手を受入れる際に重要だと思うことを3点挙げる。第一に事前のコミュニケーションである。具体的には、相手の要望をよく聞き疑問には答え、こちらからも情報提供をするということである。特に、宿舎等の料金は予め伝えないと相手に不都合を招くと思う。

第二に、生活面でのサポート役を用意することである。私自身は、図書館の金封希さんに生活面に渡っても助けて頂いたので、研修中困ることはなかった。コミュニケーションがとれて、なおかつ年齢も近い同性の職員が当たると理想的だと思う。

第三に、なるべく多くの職員が関わることである。受入れ部署や韓国語研修の受講者等が中心となることに異論はないが、それ以外の職員もできるだけ食事をする機会などを持ってほしいと思う。私自身、図書館以外の様々な部署の方と話をする機会があり、大変ありがたかった。多くの人に関心を持ってもらい、強く歓迎されていると感じた。

また、現在はインターネットで手軽に翻訳サイトを利用することができる。資料などは、日本語で書いたものを機械翻訳して用意すればよいと思う。

(3) 今後の業務への展開

所属係の本務との兼ね合いはあるが、個人的には韓国関連資料の所蔵リスト作成、未登録の韓国語資料の整理、韓国関連資料の選書候補リスト作成に着手したいと思う。

今後は、韓国の仁済大学校との交流協定も始まる。韓国からの留学生・そして韓国留学を考える茨城大学生のためにも、図書館サービスを充実させていきたい。

< おわりに >

最後になりましたが、今回の研修にあたってお世話になった方々にお礼を申し上げます。

このような機会を与えて頂いた茨城大学への感謝の念を、今後の当研修への協力という形でお返ししていく所存です。今後も当研修が続くことを切願致します。